

# ジェイムズ・ボールドウィン研究

——『白人へのブルース』を読んで——

荒井 健二郎\*

A Study on James Baldwin:

Blues For Mister Charlie

Kenjiro Arai

要 旨 小説を書くことに行き詰まりを感じていたジェイムズ・ボールドウィンは、エリア・カザンの勧めに従い、戯曲を書くことに活路を求めようとした。その結果生まれたのが、初戯曲『白人へのブルース』(Blues For Mister Charlie, 1964)である。演劇という初めて手を染める形式の中で、ボールドウィンは、映画的手法ともいえるフラッシュバックの多用や時間的順序を追わない場面構成、上演時間の驚くべき長さといった実験的要素を取り入れており、演劇に対する彼の並々ならぬ意欲を汲みとることができる。しかし、その試みは成功に結びついたとは言い難い。そのことが、観客側に人間関係の構築を困難にさせているからである。しかし、彼の意欲が実を結ばなかった最大の原因は、実験的要素を取り入れた以上に、脚本の組み立ての不味さにあるように思われる。この戯曲は、1955年ミシシッピ州で起こったエメット・ティル事件に基づいたものであり、テーマは白人と黒人との関係を洗い直すことにあったはずだが、それがいつの間にか、黒人の父と息子の関係を洗い直す二重構造に変質してしまっているからである。

『白人へのブルース』はブロードウェイのアンタ劇場で1964年4月23日に幕を開け、8月29日に148回の公演回数をもって幕を下したプロパガンダ・プレイである。148回という公演回数から、この舞台が成功したとは言い難いが、実は開幕する前から、プロダクション側のアクターズ・スタジオとボールドウィンとの間で、この舞台に勝るとも劣らない凄絶なドラマが展開されていた。それは、アクターズ・スタジオ側が入場料金の安さ(できるだけ多くの黒人客に観てもらいたかったボールドウィンは、当時の黒人達が劇場に出かける習慣がなかったことを考慮して入場料金を安く設定。そのことで製作費の回収ができそうになかった。)、上演時間が長すぎる(2001年の夏、ニューヨーク滞在中に、ワシントン・スクエアに面したジャドソン記念教会でこの作品が原作に忠実に上演されているのを見る機会があったが、10分の休憩2回をはさみ約4時間の上演時間であった!)、その脚本——白人客に外方を向かれるかもしれないと思わせるほど強すぎる白人批判、時間的順序を追っていないことやフラッシュバックを多用しているために、理解しにくい人間関係——に不満を抱いていたのに対し、ボールドウィンの方でも演出方法や配役に疑問を抱き、双方の

\* 本学教授 アメリカ文学・演劇

主張は平行線をたどったまま波乱含みの幕は上がってしまったのである。その後も両者は歩み寄ることができなかつたため、開幕して1ヶ月後、アクターズ・スタジオ側は1週間後に上演打ち切りを発表、それに対してボードウィンは激怒し、公演を続行させるため経済的支援を求める旨の新聞記事を掲載、結局ロックフェラー姉妹からの経済的支援を取り付け、それから約3ヶ月にわたって続演することができたのである（続演するに当っては、観客が理解しやすいように、事件を時間的順序を追った配列にしたいという演出家の希望をボードウィンは受け入れざるをえなかつた）。ボードウィンの頭痛の種は、実はそれだけにとどまらなかつた。愛人であり、マネージャー役を務めてもいた男性ルシアン・ハーパズバーガーが、ファニタ役の女優ダイアナ・サンズと恋に落ち、結婚してしまったのである。ボードウィンにとってこの衝撃は大きく、脚本の変更でプライドが傷つけられたことも加わって、この舞台への情熱は急速に冷めていったといわれている。

ボードウィンはエッセイ『次は火だ』(*The Fire Next Time*, 1963)の中で、黒人であり、アメリカ人として、自らの主張を明確にした。翌年初めて手を染める演劇という形式で、芸術家として、また活動家として、自分の主張をより明確にした。50年代のボードウィンは、彼と親交のあった白人作家のウィリアム・スタイロンの言葉を借りれば、「白人と理解しあいたいという気持と、アメリカの現体制がつづく限りは、絶対に白人と黒人の連体はあり得ない<sup>1)</sup>」という思いの中で揺れ動いていた。しかし、60年代に入り、黒人人権闘争が激化し、キング牧師の提唱する非暴力による運動では限界があり、白人を教化できないという認識に変わっていく。事実『白人へのブルース』でも、非暴力でのデモを1年以上もやってきたけど、成果はゼロに近かったと黒人達が嘆く台詞が第1幕の始めにでてくる。

ボードウィンはこの作品冒頭の「覚え書き」と題する中で、この作品を書くに至った直接の動機はエメット・ティル事件だったと述べている。この事件は、1955年ミシシッピ州で白人によって不当に殺害された黒人青年の事件であり、その白人の犯人は無罪釈放となっている。ついでながら、無罪判決が下された後、犯人ウィリアム・ブラッドフォード・ヒューイは、もはや自白として引用される恐れがなくなったために、『狼の口笛』(*Wolf Whistle*)と題された文章を残しているし、犯行を援助した彼の兄弟は、当時ミシシッピ州ルールズヴィルの保安官代理でもあった。そして、もう1つボードウィンに強い影響を与えた事件が、メドガー・エヴァーズが1963年白人至上主義者によって射殺された事件だった。公民権運動家として活発な活動を展開していたメドガー・エヴァーズと、ミシシッピ州の奥地へ一緒に短い旅をしたことがあったボードウィンは、彼が不当な殺され方をしたことに對して、決して見過すことができなかった<sup>2)</sup>。

『白人へのブルース』から透けて見えるものは、ボードウィンの白人達に対する激しい怒りである。その怒りのすさまじい炎は、紙面を焼き尽くしてしまうのではないと思われるほどである。ボードウィンのこの作品完成に向けての真意は、これら2つの事件にとどまらず、遠く奴隸制度にまでさかのぼり、キリスト教徒として愛を与えることを求められているはずの白人達が、自

らの利益を優先させるためにその教義には目をつむり、不当に繰り返してきた黒人差別や虐待の歴史によって犠牲となった黒人達へのレクイエムというよりも、黒人達が耐えがたいほどの譲歩や忍耐を強いられてきたことに何ひとつ目を向けることもなく、それが当然だと言わんばかりの態度をとりつづける白人達の鈍感さや狡猾さへの糾弾である。作品の中で、ボールドウィンの分身と思われるメリディアンという黒人牧師の次の台詞が、この作品に対するボールドウィンの思いのすべてを伝えている、「私はこの地を捨て去ろうとは思いません——異国の地ではあるにしても、今は私達の母国なのですから。けれども、かつては主人であり、今は、真の意味では、肉親であり、兄弟姉妹でも、両親でもある者たちから、加えられるこのような冷酷さに、永遠に耐えしのべとは、私としても、子供達に求められましょうか。自分達の行為を否定し、自分達の肉親を否認する民族に、しかもそうしたことを純潔と愛の名によって、イエス・キリストの名によって、行う民族に、どのような期待がいただけますか。主よ、このような深い暗黒を征服するためには、どれほど強烈な光が必要でありますことか！」<sup>9)</sup> 白人と同じアメリカ人であるはずの黒人が、このような絶望的な思いを抱かざるを得ない悲劇的な歴史は、決して繰り返してはならないもので、一刻も早く決着をつけるべきであり、もうこれ以上待てないものであるというボールドウィンの心の叫びが聞こえるようであり、その裏にある毅然とした決意を読みとることができるようでもある。ボールドウィンは「覚え書き」を次のように結んでいる、「我々この国の者たちは恐ろしい暗黒の中を歩んでいるのであり、これはその現実と光明の力を立証しようとする、一人の人間の試みなのである」<sup>10)</sup>と。白人と黒人との関係が危機的な状況にある中で、その関係を洗い直すことによって、何とかして一条の光明を見いださんとするボールドウィンの切羽詰まった悲壮感を見る思いがする。

『白人へのブルース』は3幕で構成されている。第1幕の冒頭で、主人公の黒人青年リチャード・ヘンリが白人商店主のライル・ブリテンによって、2発の銃弾を浴びて絶命するシーンを、観客は目撃する。次に、なぜリチャードがライルによって殺されなければならなかったのか、「謎解き」的興味をもって舞台を見つめつづけるうちに、この作品を理解する上で、極めて高いハードルを飛び越さなければならないことに気づかされる。それは、各場面が映画などで見られるフラッシュバックが多く用いられているばかりでなく、時間的順序を追っていないために、場面ごとに登場人物を肉付けして、積み上げていき、全体像を理解するという作業が非常に困難であるということである。第1幕では、1日という時間的枠の中で、様々な側面を場面ごとに提供してくれる主人公のリチャードは、その点で際立っており、彼の抱える心の闇を分析・理解する上で大きな障害となっている。しかし、この作品の核心は、リチャードが白人至上主義者のライルによって、なぜ殺されなければならなかったのかということにあり、リチャードの台詞を通し、万難を排してその人間像の解明に取り組まなければならない。

リチャードが初めて登場する回想シーンは、祖母とのシーンである。リチャードは8年近い北部での生活を経験し、ニューヨークではあと一步のところまでスター歌手の座につく寸前に麻薬中毒者となって挫折、南部の生まれ故郷に戻ってきたところである。彼が自分の夢をつかみそこねただけ

でなく、麻薬中毒者に追い込まれたのは、白人女性達が自分の性を貧り、その体力維持のために麻薬に手をださざるをえなかったからだと自分を納得させている。しかし、元を正せば、自らの意志で行なった行為であるという点には目をつむり、自分に都合の悪いことを白人の所為にするのは、責任転嫁でしかないし、人間的な未熟さを露呈するものでしかない。そして、リチャードが南部を離れるきっかけとなり、今も消えることなく彼の心を深く抉っているもう1つの傷は、母親の死によって生じたものである。母親の死に関する非難の矛先は、母親を死に追いやった白人に対してばかりでなく、その白人に対して一切の抗議をしなかった牧師の父親メリディアン・ヘンリにも向けられている。非難の度合は、黒人と白人との力関係において、絶対的優位な立場にある白人に対してよりは、皮膚の色が同じでより身近かな存在の父親に対しての方が、より鋭く、より執拗である。「俺はね、知ったかぶりをする人間に逢うと、ことに正邪をわきまえた人間に逢うと、いつも徹底的に追求してやるんだ！」<sup>5)</sup> 知ったかぶりをする人間、正邪をわきまえた人間は、自分の父親を指したものであるように思われる。「俺がこの土地を出て行った時には、誇りに思える父親とはどうしても思えなかった。」<sup>6)</sup> 「母の亡くなったあの日、父がピストルを持って行って、あの癪な白人ホテルの中をのし歩き、あそこの奴らを片っぱしから射ち殺してしてくれたら、と残念な気がする。この土地を出て行ってからというもの、俺はあの日のことを始終夢に見た。あのホテルの玄関前の石段をころげ落ちていく母の姿をだ。俺の母の。母が足をすべらせたのだなどと、俺は最初から信じてもいなかった。白人の奴らに突き落とされたに違いないと、前から思っていた。父もそう思っていることは知っているんだ。だが現場にはいなかったのだから、父は口に出しては何ひとつ言えず、どうすることもできなかった。俺には父のあの時の顔つきが一生忘れられないだろう——うちのめされ、うちのめされたうえにも、またうちのめされたあの顔つき！」<sup>7)</sup> これらのリチャードの台詞からは、失意、無念、焦燥、不満、憎しみ、絶望などの感情が交錯する。しかし、ここで見落としてならないのは、白人の犯行によるものと思われる母親の死に対して、父親が復讐という手段を講じたとすると、次にはその報復として、白人による父親の死が待っているのは自明のことで、自らの気持を充足させるために、父親の死を容認していると解釈できる。即ち、リチャードと父親との関係は、正常な父子の関係というよりも、他人同士の関係に近いものであり、歪であるといえるであろう。リチャードは自分の不遇を次のように総括する、「俺のなめさせられたいっさいの惨めさも奴らのおかげだし、俺にはそれだけでも十分な理由がある。俺の母が命を落としたのも、俺の父親には何の力もなかったからだ。父親が何の力も持っていないのは、父親が黒人だからなのだ。黒人が権力を握るには、白人を1人残らず海へ追い落としてやるしか方法がないのだ。」<sup>8)</sup> 「もしもの時には、奴らの1人を必ず道連れにしてやる。」<sup>9)</sup> リチャードは昂ぶった気持でポケットから取り出したピストルを祖母に見つけられ、憎しみは毒でしかなく、自分の身を滅ぼすものになるものであるといさめられる。この認識は、ボールドウィン自身が白人との関係において、経験を通して身につけた認識——「自分の生命は、自分の真の生命は危険に瀕しており、その危険は、他の人間から加えられるかもしれない危害からではなく、自分の心の中に抱いている憎悪からくるものである。」<sup>10)</sup>——と重なる。この時点で、自らの不遇、母親の死、父親の無力といった材料の数々は、すべて白人の所為であるとするリチャードの思考回路は、ライル・ブリテンとの対立と死と

いう作品のモチーフと完全に符合する。

次のリチャードのシーンは、飲食店でのシーンである。ファニタという黒人女性がビートという黒人男性を伴って姿を見せ、リチャードを含めた3人は連れ立って、通称Dおやじという黒人男性の経営する飲食店へ行き、話の花を咲かせる。このシーンで観客側のリチャードに対する新しい発見は、リチャードが故郷を離れる前に、リチャードとファニタは互いに好意をもちあっていたらしいこと、ライル・ブリテンの素性——黒人に対して差別的な態度をとる根性曲りの白人商店主であること、そのため黒人達は不買運動をしていること、数年前に黒人男性を射ち殺したのに何ひとつ責任追及がなされなかったこと、その黒人男性の妻と性的関係をもっていたらしいこと——がリチャードに知られること、北部にいた時に性的関係をもった白人女性達の写真をこれ見よがしに見せて、Dおやじから「分別がない」とたしなめられたりする、虚勢を張った未熟な一面を垣間見ることである。その後のリチャードとファニタの2人だけの会話の中で、リチャードはファニタの夢——北部の法律学校で学び、この土地へ帰って弁護士になること——と、ファニタが自分を愛してくれていることを知る。しかし、本来自分という人間を愛したことがなく、北部で白人女性達との刹那的な愛に耽けり、それ以外に愛と呼べるものを経験したことがないリチャードに理解できるものは、ファニタの自分に寄せる愛とは、好意以上のものかもしれないということであり、気後れしてしまう一方で、これまで味わったことのない、何か素晴らしいものかもしれないと想像したりもする。リチャードがファニタに耐えがたかった北部での生活や、麻薬中毒者になった理由を話している時、ライルが入ってくる。リチャードとファニタがジュークボックスから流れる曲にあわせて踊っていると、用が済み、出て行こうとしたライルとファニタの体が接触、その時リチャードとライルは初めて言葉を交わす。これまで白人に散々辛酸を舐めさせられてきたため、ライルの素性を知って白人への敵意が頂点に達したリチャードは、ライルにとげのある言葉を投げつけ、ライルの反感を買うことになる。

第1幕の最後に登場するリチャードの回想シーンは、父親メリディアンとのシーンである。そして、このシーンはいろいろな点で、とても興味をひかれるシーンでもある。観客側は、この作品の核にあるのは、リチャードの不遇、母親の死、父親の無力に対して、リチャードの怒りは白人に向けられていたものとばかり思っていたのが、実はそれ以上に母親の死に無抵抗であった父親に対する怒りの方がもっと大きかったと知って、驚かされる。父親が沈黙を守りつづけなければならなかったのは、白人の絶対性という巨大な山が立ち塞がっていたためであることは明白であり、父親が自分の身の安全ではなく、息子の将来を考えてとった行動だと暗黙のうちに観客側が了解していたのに対し、リチャードは観客と同じではなかったのだ。推測してみるに、ボールドウィンが第1幕の最後に、父と子の対立と和解というこの作品の中では趣を異にするシーンを挿入した背景には、劇的効果を高める狙いがあったと思われるが、その狙いは十分な成果を上げているどころか、作品の本質からはずれ、観客を混乱に落とし入れてしまうという逆効果となってしまう、ハワード・M・ハーパーの言う「社会批評の仮面をつけたメロドラマ」<sup>11)</sup>にすり替ってしまっている。

リチャードの中では、牧師職を務める父親が母親の死に対して、公人の部分を優先させ、私人として具体的な抗議をひとつとしてしなかったことこそ最大の不満であったことを観客側は思い知る

に至り、リチャードのあまりの幼稚さに暗たんたる思いにさせられてしまう。リチャードは長いこと心の中でわだかまっていたその不満をぶつけて父親を土俵際にまで追い詰め、漸く父親の本心を引き出すことに成功する。「私としては、お前のことを考えなければならなかった。お前を——無益な恐ろしい疑惑に毒させたくないと思ったのだ。お前の生涯を破滅させたくなかったのだ。それでなくても、お前の生涯も苦しいものになることはわかっていたのだから。だから私はお前を行かせたのだ。その方がお前には生きやすいかもしれないと思った——故郷から離れさせたほうが——私はお前をこの町で成人させたくはなかったのだ。」<sup>12)</sup> 父親の本音を理解することで、リチャードは漸く観客側と同じ地平に立つことができるといえるし、またこの言葉を聞くために、実に8年近い回り道をしなければならなかったということもできる。そして、この時点で、メリディアンとリチャードの父と子の関係は、それまでの歪だった他人のような関係から、正常な関係に軌道修正が完了したことを意味する。リチャードは父親に対する不信感を取り払い、自分という人間を受け容れることで自尊心を取り戻す。そして、未熟な青年から見事なまでの成熟さを感じさせる人間に成長し、再生する。メリディアンの方も、息子から憎まれているかもしれないという疑念を払拭できて、再生を果たす。「お父さん、僕はもう一度やり直してみるつもりです。」<sup>13)</sup>「僕とファニタが一緒になることには、お父さんも賛成してくれますか。」<sup>14)</sup> 父と子がお互いを受け容れることによって、この作品は完結してしまったといえないこともない。しかし、次のリチャードの台詞でこの作品は予想もできなかった方向に動き始める、「これはお父さんに預っておいてもらいましょう。僕が返して下さいと言うまでは、保管していてくれませんか。その代わりに、僕が返して下さいと言った時には必ず渡して下さい。」<sup>15)</sup>と云って、ピストルを父親に手渡すのである。「リチャードは、父親の心の奥にある自分に対する愛に触れることによって、当初の白人に対する憎しみから、何かの時には道連れにしようという思いの強さを更に強くする代わりに、ピストルを父に手渡すことによって、その目的さえも明け渡してしまう。」<sup>16)</sup>

1日という時間的枠の中で、リチャードは様々な人間的側面を提示して、観客を楽しませることには大いに成功したといえるであろう。しかし、リチャードがなぜライルによって殺されなければならなかったのかという最初の謎に、新たにもう1つの謎が加わったことを、観客は受け入れなければならない。

第2幕でリチャードが登場する回想シーンは1つだけで、ライルが経営する商店に、散歩の途中友人である黒人青年ロレンゾとコークを飲み立ち寄りるシーンである。黒人達が不買運動をしている店に入っていくこと自体は勇気のある行為だと考えられるが、ここではリチャードの特別な意図が見え隠れする。このシーンのリチャードは、第1幕の最初に登場する時のように、白人への敵意や憎しみをむき出しにした挑戦的な姿であり、そのために、たとえ相手が白人至上主義者のライルだからということではなく、同じ皮膚の色をした黒人であったとしても、好印象をもたれることは万に一つもないような最低レベルの人間である。虫けら程度の存在としか思っていない人間に、人間としてのプライドばかりでなく、性の部分にまで踏み込んで罵倒されたことで、リチャードに対するライルの敵意は決定的なものになる。2人の口争いは取っ組みあいへと発展、最終的には力に

勝るリチャードがライルを殴り倒して店を出ていく。この第2幕は、第1幕冒頭にリチャードがライルによってピストルで射殺される謎を解き明かす役割を果たしている。

第3幕はリチャードの殺人事件から2ヶ月後の法廷。ライル・ブリテンの裁判が行なわれている。しかし、陪審員席には黒人の姿はない。裁判は最初からライルに無罪判決が下されることが予想されている。リチャードと関わりの深かった人物が次々と証言台に立つ。その中で注目すべきは、Dおやじ、ファニタ、父親メリディアンの3人である。Dおやじはリチャードが殺された夜、最後にリチャードと話した証人として証言する。そして、リチャードが自分に話してくれた興味深い話を披露する、「僕は今になって自分の生涯を理解しだした感じなのだ——生まれてはじめてね。今なら過去がふりかえれるし、それが今までのように苦痛ではないのだ。僕はファニタをこの土地から連れ出してやりたい。ここはあの子の暮らせるところではない。いまに奴らに殺されてしまう——こんなところにとどまっていたのでは！」<sup>17)</sup>「僕は生まれて以来、苦痛と暗黒の中で過ごしてきたのだ。生まれて以来ずっと。だから今のような気持ちをいだきだしたのは、今度がはじめてなのだ——ことによると、おれの生涯も苦痛と暗黒ばかりではないのかもしれない、といったような気持ちをね。ことによると、それ以上の何かがあるのかもしれないのだから。」<sup>18)</sup>

人間的成熟さを身につけ、自分の生命が終焉に近づいていることを予想できるリチャードは、かつては見えなかったものが次々と見えるようになっていく。そして、短かった自分の人生が決して意味のなかったものではないことを理解しはじめていく。人生に背を向けて生きてきたリチャードが自尊心を手に入れて再生し、漸く前だけを見つめて生きていく決意をした時、白人の不当な扱いによって容易にその決意を断ち切られてしまうその皮肉に、リチャードと同じ皮膚の色をした黒人観客は、自分の人生を重ねて同情し、ライルと同じ皮膚の色をした白人観客は、キリスト教徒としての良心を呼び起こされ、心の疼きをおぼえることを余儀なくされる。Dおやじは、リチャードは「ちゃんとした分別をもって」と総括して証言台を離れる。第1幕で「分別がない」といさめたDおやじには、ライルに殺される夜のリチャードは別人のように映っている。ファニタは、自分を安全な場所に連れ出してくれることを説き伏せることに成功したところで、ライルに殺されてしまったのだと証言する。自尊心を手に入れて自分という人間を初めて愛することができるようになったリチャードが、生まれて初めて自分以外の人間を愛し、その人との未来を頭の中に描いてみたことは、リチャードの人的成長の何よりの証といえるのではないだろうか。ただ、どうしても拭いきれないのは、ファニタとの未来を誓いあったはずのリチャードが、それならば尚更、いかなる手段を講じてでも、ライルの毒牙から逃れることができなかつたのだろうかという素朴な疑問である。しかし、この疑問は間もなく解明される。最後に証言台に立った父親のメリディアンは、リチャードが自分に語った印象的な言葉——「自分は白人よりも強者なのであり、ピストルなど持たなくても暮してゆける」<sup>19)</sup>を紹介する。「白人よりも強者である」というのは、ポールドウィンの基本的認識——白人との関係において、苦悩を数多く経験した黒人の方が人的には優者である——をふまえたものであり、リチャードの人的成長を裏付けるものでもある。

判決は予想どおり無罪。同じ事件を2度裁判にかけることはできないのだから、真実を聞かせて

ほしいというメリディアンの懸命な願いに応じて、ライルはただ生意気だったからだと告げる。それを受け、第3幕の終わりでメリディアンは決意を述べる、「われわれの場合は、すべてが聖書と銃で始まったのだ。いずれ、おそらくは、聖書と銃で終わりを告げることになるだろう」<sup>20)</sup>と。

最後に、残された2つの謎を解明しなければならない。

1つ目は、「なぜリチャードはライルによってピストルで射殺されなければならなかったのか」という謎である。観客は第2幕によって、その原因が、白人至上主義者のライルがリチャードの自分への口のきき方が生意気だったことが許せなかったという極めて単純な動機だったことを知って、衝撃を受ける。しかし、観客が要求されているのは、この事件がもし逆の場合だったらという点を考えてみることなのである。キリスト教徒としては明らかに矛盾する行為の数々を黙認してきた白人達と、ただ耐え忍ぶことだけを学びつつなければならなかった黒人達の、この両者の極端な生き方が、民主主義を標榜するアメリカの大地で繰り返されてきた忌まわしい歴史に、メリディアンは率直に疑問を呈する、「私の息子も私も、キリスト教徒の行動に関しては、深い不審の念を抱いていました。息子は、キリスト教徒がなぜ黒人に対して現在のような態度をとるのか、不思議がりました。私もその疑問には——納得できる解答を与えてやれなかったわけです。」<sup>21)</sup>

リチャードが白人への憎しみを氷解させるために必要なものは愛であるが、その愛はファニタという他人からの愛ではなく、リチャードが自分自身に捧げる愛である。ファニタから愛を告げられた時、リチャードは自分を愛することができる人間ではない。自尊心を回復してはいないからである。リチャードはまず個を確立しなければならない。黒人は人権の数々を奪われていようと、人間としての尊厳回復に努めなければならない。そして自分を受け容れ、愛することができるようになることで、白人と同じ地平に立たなければならない。それが叶えられてはじめて自分以外の人間の愛に応えられるからである。第1幕でリチャードがファニタから愛を告げられた時、ためらってしまうのは、ファニタに対する愛を感じていないからではなく、感じているからこそ、まず父親との和解によって自尊心を取り戻すことが急務だと自覚しているからである。

ただ、1つ目の謎について不明な点があるとすれば、命を落とす時点のリチャードは、人生を悲観して生まれ故郷に戻ってきた時のリチャードではなく、見違えるほどの人間的成長を遂げたりチャードのはずである。ボールドウィンはこの作品の上演に当って、各俳優が役作りをする上で、参考にすべき登場人物像についてのポイントを記しているが、リチャードについては次のように記されている、「リチャードが白人を許すことがあるとすれば、自分を許すことができた時である」<sup>22)</sup>と。自分を許すとは自分を愛すると読み替えることも可能だと思われるが、そうだとすれば、命を落とす時のリチャードは、ボールドウィンの要求は満たしているといえる。それでもまだ釈然としない。非道な白人を許すことと、自らの命を投げだすことがどうしても結びつかないからである。最後の切り札があるとすれば、それはメリディアンの最後の台詞——「われわれの場合は、すべては聖書と銃ではじまったのだ。いずれ、おそらくは聖書と銃で終わりを告げることになるだろう」——である。それまでの経緯から、メリディアンが後者を指しているのは明白である。ボールドウ



インの分身と考えられるメリディアンは、息子リチャードが白人によって不当に殺害されたという後押しによって、漸く長い眠りから覚醒する。キング牧師の提唱する非暴力＝聖書では限界があり、白人と黒人との関係は何も変わるものではなく、たとえ銃＝暴力に訴えてでも立ち上がらなければならないという認識に到達する。そのためには、リチャードは父親と和解して、銃を差し出さなければならない。即ち、1つ目の謎と、2つ■の「なぜリチャードはピストルをメリディアンに手渡さなければならないのか」という謎は、連関しているのである。リチャードの使命は、父親のメリディアンと和解してピストルを父親に手渡し、黒人との争いによってではなく、白人との争いによって命を落とすことにあるのだ。リチャードは父親と和解し、ピストルを差し出した時点で、人生を全うし、作品上の役割を終え、主役の座をメリディアンにバトンタッチしなければならないのだ。一方メリディアンの使命は、息子リチャードが白人によって不当にも命を落とした事実を受け、それまで封印していた妻も白人によって不当にも殺されたという事実を受け入れ、たとえ牧師職に就いていようと、今度こそ公人を棄てて、私人として妻と息子の無念を晴らすべく立ち上がる決意をすることである。

ボールドウィンは、エメット・ティル事件を素材にして、『白人へのブルース』の中で白人と黒人との関係を洗い直すことを試みた。その試みは、決して成功したとは言いがたい。リチャードがライルに殺されるために、故意に悪態をつくような不自然な印象を拭いきれないからである。しかし、多少の不備はあったとしても、ボールドウィンがエッセイ『次は火だ』につづき、初めて手を染める演劇という形式で、芸術家として、また活動家として、自分の方向性を問いかけた作品としての意義は、いささかも揺らぐことはない。

#### 注

- 1) 「ハーレム135丁目——ジェイムズ・ボールドウィン抄——」カーレン・トーセン監督、1989年より。
- 2) 映画「ゴースト・オブ・ミシシッピ」(ロブ・ライナー監督、1996年)に詳しい。
- 3) James Baldwin: *Blues For Mister Charlie*, Laurel, 1964, p. 105.
- 4) Ibid., p. 8.
- 5) Ibid., p. 32.
- 6) Ibid., p. 34.
- 7) Ibid., pp. 34~5.
- 8) Ibid., p. 35.
- 9) Ibid., p. 37.
- 10) James Baldwin: *Notes Of A Native Son*, Beacon Press, 1957, p. 98.
- 11) ハワード・M・ハーパー著『絶望からの文学』, 荒地出版社, 1967, p. 191.
- 12) James Baldwin: *Blues For Mister Charlie*, Laurel, 1964, p. 53.
- 13) Ibid., p. 54.
- 14) Ibid., p. 54.
- 15) Ibid., p. 54.
- 16) Philip Roth: *James Baldwin* edited by Harold Bloom, Chelsea House, 1986, p. 39.
- 17) James Baldwin: *Blues For Mister Charlie*, Laurel, 1964, p. 118.
- 18) Ibid., p. 119.

19) Ibid., p. 134.

20) Ibid., p. 157.

21) Ibid., p. 134.

22) David Leeming: *James Baldwin*, Knopf, 1994, p. 235.

尚、『白人へのブルース』の訳文については、橋本福夫訳（新潮文庫）を参考にしたことを付記する。